

創立100周年記念
報道局特別連載企画南高 **あの先輩に学ぶ**網走市長
水谷洋一さん

水谷洋一さん

1963年4月8日生まれ。南高卒業後、早稲田大学卒、北大大学院修了。JA北海道中央会に勤務したのち、政界進出。網走市議会議員を経て、2010年より網走市長。

また、旧校舎では食堂も開放されていたため、昼食では全日制・定時制問わず食堂でそばやラーメンなどを食べることが出来たという。

創立百周年を記念して行ってきた「南高 あの先輩に学ぶ」もついに最終回を迎える。第5回は南高を卒業後、JA北海道中央会などを経たのち網走市長に就任、現在に至るまで現職を務める水谷洋一さんに話を伺った。

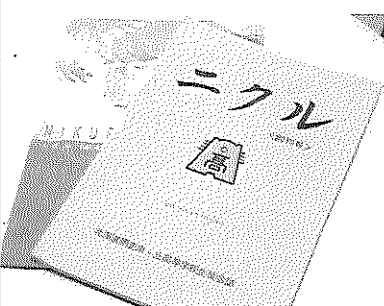
当時の学校生活は
水谷さんの高校生時代は、ちょうど南高が旧校舎から現在の校舎へと移り変わる時期だった。水谷さんは旧校舎の様子を「旧校舎に石炭ストーブがあった、冬はよく生徒が集まっていた」と振り返る。その一方で現在の校舎は「そういった設備がなくなり、休み時間の交流が減った」と明かした。

JAに就職し、S席のチェットを手に入れた水谷さん。政治の世界を見つづけるうちに、時代が変化していきうちに沸き上がったのは、「政治の舞臺の横でディレクターとして指示を出したい」という思いだった。

政治の舞臺へ
南高を卒業後、早稲田大学に進学、JA北海道中央会に就職した水谷さん。就職のきっかけを伺った。大学では政治サークルに参加し、当時から政治に強い関心があったという水谷さん。当時はGATTの貿易交渉に伴う農作物の輸入自由化などを巡り、JAなどの団体と政治とのつながりが深かったことが就職の決め手になったという。また、同時にマスコミも志望していたという。「どちらから真正面で見たい」という思いがあった」と、当時の志望理由を語った。

生徒会誌「ニクル」創刊のヒミツ
「高校生の思い、伝えたい」
南高では生徒会に所属し、生徒会長も務めた水谷さん。水谷さんが始めた事業で、今も引き継がれているものがある。生徒会誌「ニクル」だ。事実、「ニクル」創刊号の表紙を開くと、当時生徒会長だった水谷さんの文章が載せられている。なぜ「ニクル」を発刊しようと考えたのか。局員の質問に「他校が学校の1年間間の動きをまとめた生徒会誌を作っていた。南高でも生徒会側から見た学校の様子を記録したものを作りたい」という思いがあった。

水谷さんが行った政策
市長就任後から現在に至るまで、水谷さんは様々な政策に取り組んでいる。例えば限られた地域にのみ情報を伝達するコミュニティFM局、現在の「F M A B A S H I R I」の開局の推進。水谷さんは「検索して出てこない情報は、世の中に存在しないのも同然」であり、比較的規模の小さい地域の情報は淘汰されてしまうと考える。そんな中、地域の情報を発信する為水谷さんが目を付けたのがコミュニティFMだったという。



▲ニクルの創刊号と最新号

水谷さんは先んじて生徒会誌を制作していた帯広柏葉高校、帯広三条高校に直接赴いたという。当時のニクルの内容は、定番のクラスページや1年間の学校生活の振り返りのほか、今も続く「生徒アンケート」の端緒も見られた。「意識調査」という

夢を叶えるには
南高生が夢をかなえるために必要なこととは。「100年目を迎えて、今の南高生は歴史の目撃者になっていると思う。今大切なのは、101年目をしっかりと迎えること。それにあたって、南高生という意識を強く持つためには、

南高の3つの理想を抱くことが大切」と話す。加えて、「集まり散じて人は変われど仰ぐは同じき理想の光」という言葉を引用したうえで、「100年前の南高生も今の南高生も、集まり、そして散じていく中で変わっていくけれども、同じ『理想の光』を見ている。その『理想の光』こそ、南高の3つの理想（校訓）と、校訓を改めて強調した。

人生は思いっきり
最後に、100周年を迎える南高生への応援のことばをいただいた。「若さはすべての可能性だと思おう。乗り越えられないものがあれば、くぐってみればいい。発想を変えて前に進めば、必ずあなたの道は開ける。あなたの人生はあなたが決めるもので、誰にも邪魔する権利はない。思いっきりやってみよう」と激励した。

若さは**は全ての可能性**

「発想を変えて前に」



発行所
網走南ヶ丘高校
報道局
発行責任者
歌丸 昊成

創立100周年記念式典

11月12日(土)

13時30分挙行

「政治の最終バス」乗り逃した経験
JA 政治運動の最前線で